
有り得ない世界にわたし

kiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有り得ない世界にわたし

【Nコード】

N9203Z

【作者名】

kiir o

【あらすじ】

知らないけど、マフィアの娘に。

とりあえず、一生懸命に生きる事を目標に毎日を過ごす。

なぜ、どうして異世界に来たのかはわからないけど

、幸せに成るために頑張ってるうちに色々勘違いされて、話が大きくなってきた話。

お嬢様について その1（前書き）

色々不慣れで間違いもいっぱいでしょうが、許してください。

沢山、言いたい事いっぱいでも、優しく見守ってください。

完走出来るようがんばります。

お嬢様について その1

とりあえず、今日も地道に地味にいきる事を目標に頑張ろう！

自室のベッドの上で決意表明をしていた。

この世界に生きる事になってからの習慣。

「お嬢様、朝食の準備が整いました」

柊。

彼は、わたしの従者。

わたしの面倒を幼き頃から見てもらっています。
きっと、嫌がられてはいいないと思いたい。

「ありがとうございます。」

高そうなカップにお湯を注ぎ込みながら、彼はニコリと口元を上げた。

「本日は、ファミリーの皆様方ご集合の御命令が、お嬢様もと旦那様がおっしゃっております。」

「そう、わかりました。参ります。」

わたしはそう答えながら、面の厚くなった顔を笑顔に変えた。

何が起こっても驚くなんて顔は、表に出さないでいられる自信がある。だって、それくらいしか私には武器がない。

こんな変な世界に対応出来るわけない!?

ない!?

だって、だって、だって、

マフィアのドンの娘って何!!!

お嬢様について その1（後書き）

完走出来るようにがんばります。
よろしくお願ひします！

お嬢様について その2

私が初めて従者としてお勤めする事になったのは、12歳。
父に連れられ、バレルファミリーの本部にやってきた。今から15
年前だ。

バレル島を本部としている為、そう言われているバレルファミリー
は、この世界で5本の指に入る大きなマフィアだ。

バレルファミリーのドンには、3人の娘がいる。

長女、イノリさま。

二女、ミノアさま。

三女、ヒノエさま。

3人のうち、末のヒノエさまは、奥様が違う方からお生まれになっ
ている。

わたしは、三女ヒノエさまの従者として推挙された。お嬢様、当時
2歳。

ヒノエさまの従者になるに辺り、マフィアとして力のあるもので、
年も近きものではなくてはならないと強く、ドンとドンナに言われ
た。

父は、ドンの幹部を務めていた。

2歳と12歳。

近くはないと思うが、私が従者になった。

ドンの奥様は、金髪波うつ背の高い美人だ。

ヒノエさまは、黒髪で黒眼。腰程にある髪は、艶やかであるが、真つすぐ伸びている。

背も190センチほどある私から見るとかなり低い。

先日、145センチほどであると、専属の医師が言っていた。

当然、3人のうちでも一番低い。

イノリさまは、171センチ。

ミノアさまは、177センチ。

可愛らしいお顔に小さい背。

御本人は気にしているらしく、お食事は何時も魚をメインにし、ミルクをお飲みになる。

マフィアの娘だが、好戦的で派手な上の2人に対し、温和しめな方だ。慈悲深い方であり、血生臭い事を嫌うため、マフィアの役目は少々酷ではないかと思った。

14年前

「ひーらぎ、おじちゃん倒れてる。たしゅけて。」

侵入した賊をみてそうお嬢様はおっしやって、慌てて私の方に向かって走って来た。

そいつは、今お嬢様の運転手兼護衛をしている渡だ。

11年前

「柎、倒れてた。どうしよう。」

雨の日、雨具を羽織っていたお嬢様は、一生懸命走って来て私を呼んだ。

それらは、現在お嬢様のペット兼友人となっている、フォボスにデイモスだ。
因みに鷹である。

お嬢様は、マフィアのボスの娘である。

お嬢様について その3

あの日は、月の光の入らない日だった。

ワシが、このバレルファミリーの仲間入りしてから、かれこれ14年経過していた。

食うものに困り、訳の分からない奴等にファミリーに侵入して来いと言われたことがきっかけだった。

とりあえず、食べ物にはありつけたが、困ったワシは、敷地内で力尽きた。

死ぬのもイイと思った。そうすれば、すべてが終わると思ったからだ。

妻や息子は、事故でなくし目標を失っていたワシには丁度よかったのだ。

目を覚ますと、小さな手が見えた。

「だいじょーぶ、おじちゃん」

黒髪、黒眼の幼子だ。

「ああ」

「よかった」

「だれだ、おまえっ…痛っ」

「お嬢様です。そのような口は慎んで頂けますか」

幼子の後ろに控えていた、黒服の子供？はそう言ってワシを殴ったのだ。

その時、はじめて綺麗なベッドに寝かされていることを悟った。

「おじちゃん、行くとこないの？」

「行くとこ？？」

「うん、ひいらぎがいった。」

「えっ、ああ、気にするな、お嬢様」

「えっとね、じああね、こいで働けば」

「は？」「ええ？？」

「そつだ、今日からわたりね、名前はわたり。」

「渡、おはよう」

あの頃より少し成長したヒノエお嬢様が車の前に顔出した。

「おはようございます。今日はどちらへ」

扉を開けて車の中に乗車させる。

「渡。何でも皆集合なんだって…、わたし行ってどうするんだろうねえ…はぁあ」

「そつでございますね…」

「渡…!」

「はい、はい、そつだなあ…、ワシにもわからん。まあ、行ってから考えたらどうじゃ」

「ううう…、そつするしかないんだね」

「ハハハハハハ」

雇われることになってから、力のあるマフィアの末娘だと知った。護衛をするに辺り、かなり身体を鍛えなおされた事が一番しんどか

った。

ヒノエお嬢さんはワシのことを気に行つたのかよく様子を見に来ていた建前気は抜けんかった。

面白いお嬢さんで、ワシに名前を付け、新しい家族の一員とした。名づけるとは、マフィアの世界では、そういうことを意味するらしい。

一度無くしたものだつた命、それもよかろうと感じた。

あれから14年、身長はあまり伸びんかったお嬢様は、ワシより20センチも低く、未だ子供のような容顔だ。よい家柄の娘としても少し変わっているが、よき娘に育つた。

ワシも年をとつたということか…。

「渡は、イケメンだよね、だから!!」

ヒノエお嬢さんになぜワシを助けたか聞いた時、そういつた。

キラキラした顔だったので聞けんかったが、一体あれはなんだつたのか未だわからん。

ただ何か、大きな期待が含まれていたのは事実のようだったが…。

期待してくれているのだから、答えねばならんかと結論付けた。

(イケメンなら、いつれダンディーになるかもしれないし、見てみたいじゃん)

(彫の深いイタリア系ダンディズム)

「イイ感じだよねえ、わたし凄い」

「お嬢さん？」

「ううん、一人言」

ヒノエお嬢さんは、マフィアの末娘だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9203z/>

有り得ない世界にわたし

2011年12月29日16時47分発行